

北朝鮮の核開発と中朝関係

漢和防務評論 20160312 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

昨年 12 月、公演を目的に訪中していた北朝鮮の楽団が、一度も公演することなく突然中国から帰国しました。金正恩の原水爆保有発言に対する中国の批判に対抗する措置と見られています。
核実験に続く弾道ミサイル実験で北朝鮮に対する制裁が追加して課せられていますが、金正恩は、方針を変える気配はありません。
中国は金正恩の反発にどこまで耐えられるか？北朝鮮は限界を見極めようとしているように思います。

本誌編集部

北朝鮮の牡丹峰楽団が 2015 年 12 月、公演を突然中止して中国から帰国した。これは、改めて北朝鮮は理解不能な国、強情な国、交流が出来ない国、全く信用出来ない国であるとの印象を与えた。

牡丹峰楽団が中国に到着した当日、金正恩は、意表をついて：北朝鮮は、すでに原爆、水爆を使って国家主権を守る能力がある、との談話を発表した。翌日、中国外交部のスポークスマンは、当事者は、地域の平和と安定に寄与するべきであると発言した。これは金正恩を名指はせずに批判したものであり、平壤は対応せざるを得なかった。

”二つの面子潰し”は、中朝関係に再び反目をもたらした。これは単なる意地張りではなく、国家の核心利益に関わる外交闘争であり、妥協は無い。今後、中朝関係及び北朝鮮とその他の国との関係は、改善は不可能である。2015 年の中朝関係の波乱曲折を見ればわかる。初歩的な関係改善さえ、一筋縄では行かない。年初に北朝鮮が中国を批判し、中国軍が国境地区で動きがあったなどの伝聞ももたらされた。両国の軍事パレードでは両国関係がやや改善されたかに見え、牡丹峰楽団の訪中は、金正恩の訪中の前兆とも見られたが、わずか 4 日で夭折した。中朝関係は、もはや時間が解決する問題はなくなった。

金正恩は 4 つの意思を表明した：一、牡丹峰楽団の訪中は、労働党が中朝関係の改善を願ったため行われたのであるが、北朝鮮は国家の核心利益である核兵器開発を放棄することはできず、”金正日なき、金正日路線”を継続推進する、と。

二、次の核実験を暗示している可能性がある。すなわち水爆実験（口先だけ、実際は不可能）である。これは中国が絶対に容認しない。もし類似の実験が行われれば、前 3 回の核実験よりも脅威的である。前 3 回は小型原爆であったが、水爆の威力は原爆の数倍であり、放射能汚染は直接中国の脅威となる。本誌は、北朝鮮には水爆

実験を行う場所がないと考える。英国やフランスは、実験場がなく海外で行っている。

三、金正恩が核能力の向上を表明したことは、核兵器をさらに改良する意図がある。”水爆談話”が発信された後、米国を含む他国は、能力を疑った。しかし漢和は：北朝鮮が核兵器及び弾道ミサイルを一貫して開発していることから見ると、金正恩の談話は、それが出来ることを意味し、水爆、或いは強化型原爆も製造できることを意味する。たとえ後者だとしても、北朝鮮の核兵器の威力が増加していることを意味する。”すでに保有している”よりも”現在開発中”の方が恐ろしい。

四、北朝鮮は、外部世界に、すでに成熟した使用できる小型原爆を保有していることを宣言した。そうでなければ水爆が出来るはずがない？水爆を起爆させるには、小型原爆が必要だ。小型原爆の技術がなければ、如何に水爆を起爆するのだろうか？

周辺国家の”核心利益”は、極めて明確である：それは朝鮮半島の非核化である。この基本的な矛盾を徹底解決するためには：金正恩政権の崩壊しかない。そうでなければ長期化し、一步一步エスカレートする。北朝鮮の核兵器がグレードアップすれば、中国及び周辺国家と北朝鮮の対決は継続していく。

金正恩政権は、現代世界の核兵器の水準を満足させることは不可能だ。理由は単純だ。初歩的核兵器で僅かな数では、米国に対する脅威にはならないからだ。言い換えれば、戦力にはならない。北朝鮮の核施設は最初の1撃で破壊される。米、ソ、中の核兵器保有の過程から見ると、相手を牽制するためには、数が必要であり、1発あたりの爆発力も向上させなければならない。

ついでに説明すると、米、ソ（露）が現在保有する核弾頭は、多くが水素爆弾であり、1発当たり TNT 換算 30 乃至 50 万トンである。原爆の威力は、通常 20 万トン以下である。多くの戦術核兵器は、原子爆弾及び中性子爆弾を使用している。

北朝鮮の弾道ミサイルの精度は相当低く、弾頭の威力を高めることによって補うしかない。

北朝鮮は、すでに水素爆弾を保有しているか？

この問題の判断要素は以下の通り：

1. 決心 2. 材料 3. 人材 4. 技術 5. 時間 である。決心と人材は問題ない。モスクワ航空ショー、北京電子展覧会、及び航空ショーで、本誌平可夫は、北朝鮮軍事技術者と話をした。印象は、彼らは非常に聡明で多くが中国語とロシア語を同時に話し、教育水準は高かった。北朝鮮は、軍事技術教育を高度に重視し、1950 年代から核関連の留学生をソ連に派遣していた。残りは材料である。当然、水爆開発には一定の時間、着実な理論物理、化学の基礎知識が必要であり、このほかに成熟した原爆製造技術が必要である。

北朝鮮が”水爆を製造中”或いは更に高レベルの核兵器を製造中である根拠は、2015 年 9 月、韓国国家情報院が、「北朝鮮は新たな核施設を建設中であり、トリチウムの生産施設の可能性が高い」と発表したことである。これは水爆製造に不可欠の材

料である。このほかデューテリウム、ウラン 238 或いはプルトニウムが必要だ。北朝鮮は、原爆開発過程で、パキスタンからウラン精錬技術を獲得し、重水型原発にプルトニウムを隠していた。これは秘密でも何でも無い。したがって水爆の開発は、材料から言えば、鍵になるのはデューテリウム、トリチウム、重水素化リチウム等の核融合材料の獲得である。

前 3 回の核実験から見ると、原爆の威力は広島型よりも低い。いわば TNT 約数万トンに相当するレベルである。しかし水爆実験は、放射性塵埃を多く放出し、汚染度が極めて高い。

5 大国が実験した水爆の威力は、ソ連が 5000 万トン、1953 年の実験は最小規模であったが 40 万トンであった。米国は、1952 年に 1000 万トン、中国は 1966 年に 30 万トン、1967 年に、330 万トンであった。言い換えれば、北朝鮮がもし水爆実験を行ったとしても数十万トンレベルである。どこで実験するのか？朝鮮半島では実験できない。

強化型原爆の開発可能性について

これは、トリチウム、デューテリウム混合物が必要であり、熱核反応を起こさせ、原爆の威力を高めると、TNT の 10 万トン以上の威力になる。1966 年、中国は強化型原爆の実験を行った。インド、パキスタンもこの技術を掌握し引き続き水爆の開発に取り組んでいる。

北朝鮮は、核実験の道を進んでいる。進めば進むほど道は遠くなる。北朝鮮は誰を威嚇しようとしているのか？金正恩政権は、最初に国内の敵を威嚇し政変の可能性を封鎖し、同時に人心を引きつけた。次は対外作戦である。たとえ韓国に対し核兵器を使用するにしても、戦術級原子爆弾で足りる。したがって水爆及び強化型原爆の開発の根本的動機は、大国に対する”だましゆすり”であろう。対象は特に中国だ。北朝鮮は、ますます核に束縛されることになる。

以上